

## 空襲回想録

池田 浩

私は尾幌生まれ、尾幌育ちの88歳です。当時は、今の小学1、2年生くらいの頃でした。

この頃は釧路市も同じだったと思いますが、昭和20年(1945年)7月15日の早朝、16機くらいの戦闘機が編隊を組んで飛んできました。昆布森に空母が来ていて、そこから飛んできた艦載機でした。

戦闘機は我が家の右側、厚岸の方向に飛んでいき、大黒島の高射砲部隊が弾を撃ちました。しかし届かず、途中で爆発していたように見えました。被害はないので、「まずまずだな」と思いながら眺めていると、その戦闘機が厚岸の漁油タンク2～3本に爆弾を投下し、爆発が起きて真っ赤に燃えていました。その後も、何か月間も燃え続けていました。

おそらく、その時の艦載機が尾幌の校舎にも爆弾を投下し、全焼しました。兄は現在の湖陵高校に通っており、授業の半分が軍事訓練で、ある程度の知識があったため、爆発の跡を見て「10キロ爆弾だ」と教えてくれました。幸いにも学校が休みの日で、難を逃れました。

空襲の被害に遭った建物は学校だけで、自宅は無事でした。ただ、上空から牛や動物、人などを見つけると機銃で狙われていたらしく、木の陰に隠れて逃げたという話はよく聞きました。

田舎なので、自宅から防空壕まで徒歩10分ほどの距離があり、親の指示で防空壕まで走って逃げました。ところが、中に入ろうとするところを見られて、ギリギリまで狙われました。防空壕は家族用で、7人兄弟と両親、祖父母が入る、10人くらいの大きさでした。傾斜の塩梅が良いところに、護衛さんが穴を掘って作ってくれたものです。

学校が焼けてしまい、授業はおろそかになりました。仮の校舎は神社や寺に、学年ご

とに分散しており、先生が各施設を回って教えていました。自習の時間が長く、先生がいないときはよく遊んでいました。覚えているのは、近くに尾幌川があり、そこで泳いで遊んでいたことです。

女性の先生だったので、自習時間に遊んでいたのですが、戻ってきた先生は軍隊上がりの男性でした。髪の毛が濡れた生徒がいたため見つかってしまい、並べられて往復ビンタされました。

また、学校の運動場にシートを敷いて宿舍とし、軍隊30人くらいが駐留していました。子どもながらに兵隊への憧れがあり近づくと、中身の入っていない軍隊用の缶詰をもらいました。物々交換のように、畑の長芋などを渡しました。何か月も運動場に駐留していましたが、ある朝にはいなくなっていました。

家が農家だったので、当時はイモを主食にしており、お米の代わりにトウキビを砕いて、お粥のようにして食べていました。母の実家がある帯広まで汽車に乗って行き、物々交換もしました。こちらは海産物を渡し、帯広で豆などと交換してもらいました。

汽車内には警察がいて車内を見回り、荷物の検査をしていました。荷物や食料が多いことに気づかれると没収されてしまうので、一度にたくさんは交換できませんでした。

二番目の兄が工業高校に通っていたので、連れられて空襲後の釧路市に行ったことがあります。倒れている家の、炙り臭い独特な匂い<sup>あぶ</sup>を覚えています。尾幌からも釧路市が燃える様子が見えていて、夕方になると、釧路の街の燃える空が毎日のように染まっていました。

当時の新聞には戦果を挙げた記事が書かれていました。小学生には新聞の文字の半分くらいしか読めないので、親の会話を聞いていました。